

# Bernard Malamudの研究〔1〕

## — 短 篇 論 —

近 藤 正

現代アメリカ文学において、沢山の才能あるユダヤ系作家が台頭して来た。この事は一大特色として世評の認める所である。例えば、Jonathan Baumbach: The Landscape of Nightmare (1965) には

‘It is a commonplace by now that much of the excitement of recent American fiction has been generated, at least in part, by the emergence of an unaccountably large number of gifted Jewish writers.’ (P.101) と述べられているし、The Saturday Review などに屢々散見される所から、十二分に伺われる所である。代表的作家の名前を挙げてみれば、1965年に long best-seller として有名を馳せた Herzog の著者 Saul Bellow, 1967年小説で National Book Awards, Pulitzer Prize の両者をもらった The Fixer の作者 Bernard Malamud, 色々と問題を投げかけては日本のジャーナリズムをにぎわせている Norman Mailor, 地味で日本にはまだ余り紹介されていないけれども、アメリカでは人気の高い Philip Roth等、錚々たる作家がいる。

この小論の対象である Bernard Malamud は、このユダヤ系作家群の中では、Saul Bellow と並んで、現代アメリカ文学の旗頭とみなされているといっても過言ではない程の作家である。その作品には次の様なものがある。

1952	<u>The Natural</u>	
1957	<u>The Assistant</u>	(ローゼンタール賞, ダロフ賞)
1959	<u>The Magic Barrel</u>	(全米図書賞)
1961	<u>A New Life</u>	
1963	<u>Idiots First</u>	
1966	<u>The Fixer</u>	(全米図書賞 ピューリッツア賞)

以上から見ても解るように、比較的寡作の作家といつてよい。

今回は彼の作品の中から The Magic Barrel と Idiots First の二つの短篇集をとりあげ、その中から彼の特色のいくつかをとりあげてみようとするものである。( The Magic Barrel は1960年 National Book Awards を授与されており、Idiot First も同賞の最優秀候補作として最後迄残り、最後に John Updike に賞をゆずることになった程世評の高かった作品である。)

短篇集 Idiots First 中のレーゼ・ドラマ “Suppose A Wedding” の中で、主人公 Feuer が娘のフィアンセ Leon に向って、

‘I suffer for those who suffer. My heart bleeds for all the injustice in this world.’ (P.177) というが、この (common) people に対する共感 (suffering for those who suffer = compassion) が、Malamud の全短篇を流れている基本的態度である。作中人物に対する共感がなくては勿論いかなる作家であっても、作品は成立しないのではあるが、Malamud の場合は下層階級に対する徹底した共感、愛着がある。そして庶民の生活というもの、善良な性質、誠実な生活態度にも拘らず、彼らを迎えてくれるのは、次のような人生で

ある。

‘…after all the years, the years, the multitude of cans he had wiped off and packed away, the milk cases dragged in like rocks from the street before dawn in freeze or heat; insults, petty thievery, doling of credit to the impoverished by the poor; the peeling ceiling, fly-specked shelves, puffed cans, dirt, swollen veins, the backbreaking sixteen-hour day like a heavy hand slapping, upon awaking, the skull, pushing the head to bend the body’s bones; the hours, the work, the years. my God, and where is my life now?’ ( Idiots First P.144)

短篇処女作 The Cost of Living で、没落寸前の小売店主のこの嘆きに代表されるような惨めな人生なのである。彼らは結局 ‘They have nothing but poverty, disease, suffering.’ の状態で生きるしかないというのが、Malamud が愛着をもつ庶民の人生、社会に対する基本的見方である。(ここには作者の青春期の大不況時代の体験が色濃く投影されていると考えてよかろう。) 従ってこういう社会に対する作家の態度というものは、

‘A writer writes tragedy so people don’t forget that they are human. He shows us the conditions that exist. He organizes for us the meaning of our lives so it is clear to our eyes.’

—— Idiots First: Suppose A Wedding, P.177 —— になるのだと、Malamud は洩らしている。以上述べたような作家的姿勢を総括していえば、《Literature of Compassion》であろうか。これを土台にして Malamud の二大特色である ironical touch も social justice への訴えも、そこから来る社会的風刺も共に生じてできたと考えられなくもない。The Fixer の National Book Awards 授賞の理由としてあげられた、

‘for the warmth and humaniy of its feeling, …and for the balance and sanyiy of its point of view.’

—— Newsweek; March20, ’67 ——

という評言も彼の特性を簡潔だが的を得て描いているといえよう。

この基本的テーマを表現し浮き彫りさせるのに、Malamud は ① Irony, ② Social Conscience 等の方法を用いて優れた作品を書いていく。時間的にみると②の態度が後期になっている点にも注意してよい。この二点にしぼって、Malamud の短篇の特色を描いてみたい。

#### ① Irony

Idiot First 中の Black Is My Favorite Color はこの irony の好適例と思われる。主人公 Nat (44才) は、

‘… porsonally for me there is only one human color and that’s the color of blood.’ (P.18)

という気持をもつ独身のユダヤ人で、ハーレムで酒店を営んでいる。

‘I’ve tried more than once but the language of the heart either is a dead language or else nobody understands it the way you speak it. V ery few.’ (P.18)

他人に理解してもらえない the languge of the heart の人生航路を —— 如何に主人公 Nat の誠意と反対の方向に人生が動いて行くものであるかを、Malamud はこの短篇の中で展開してみせる。

④黒人少年 Buster Wilson との人間的接触の挫折; 警官に殴打されて黒人が血を流してい

るのを見て、

‘I personally couldn’t stand it, I was scared of the human race so ran home.’

(P.21)

のような性格の子供の頃、自分の父がうちのめされるのを表情一つ変えないでみつめている黒人少年 Wilson と遊ぶようになる。母の財布から金をくすねては映画に誘ったり、色々と心をつくすのだが、或る時何の理由もなく ‘Because you a Jew bastard.’ とののしられ、なぐられて歯から血を出す小事件が起り、Nat からの友情の手も ‘one-way proposition’ でしかなかったものとしてたち切られる。

④黒人未亡人 Ornita との人間関係の挫折；手袋を拾った機縁で、黒人 Ornita と交際するようになる。

‘under her purple dress she wore a black slip, and when she took that off she had white underwear. When she took off the white underwear she was black again. But I know where the next white was, if you want to call it white.’

(P.25)

このような温かい優しい思いやりのある態度に、白人に対して頑なに閉じていた Ornita の心も段々と開いて、Nat の愛を受け入れる方に傾いた頃、ふとした機会に二人夜道を歩いている時に、不良団に殴打され金を奪われたことから、Ornita との心の接触も——Nat の真意は理解され乍らも——白人と黒人との正常な交際は現実の社会では無理なのだとする Ornita が、姿をくrams することで、住所を変えてでも努力してみようという Nat の願いも空しく又しても人間の接触の絆が絶たれる。

⑤最後は小事件ではあるが、黒人对白人の人間関係の絶望を示す典型的なものである。

黒人の盲人の手をひいてやろうとすると、大柄な黒人女がやってきて、いらぬお世話だとばかり、彼をつきとばして盲人の手をひいていく。Nat は消火栓にぶちつけられて傷をするといった、誠に *ironical incident* である。

こういう色々な事件にもこりず、召使いの黒人女に親切な——といっても普通の人間として遇してやることなのだが——態度で出ようと努める。ここに徹底した *compassion* があると同時に、*ironical proceeding of life* で包んで表現し得た所にこの作品の読後感の楽しさの原因がひそんでいるといえよう。

主人公の善意の行動がすべて逆の方向に進んでいく社会、

‘I give my heart and they kick me in my face’ (P.30) といわざるを得ないような *ironical* な人生、この逆現象の人生の中にあっても、いつもくじけず諦めず温かい *compassion* の手をさしのべていく、或はいかずにはおれない主人公の、ひいては作者の人間的な心が、力強く脈うっている。善良であり、他人に対して *compassion* をもちうるが故に、この社会では苦悩する人間＝犠牲者たらざるをえないのであり、そのことが平凡な人生の儘聖者の道にもつながる所以であり、そこから生れてくる人間の尊厳というもの、作品の中に色濃くにじみ出してくるのであろう。素朴な人々の中に聖者的なものがあるとする態度——これがユダヤ人的人生肯定、生の神秘というのであろうか。同系統の批評家 Alfred Kazin はその著書 *Contemporaries* (1963) の中で、この事を、

‘It is a curious, almost uncanny transformation of the old Jewish mysticism, where earth is so close to heaven—or to hell—that the supernatural and the trivial jostle each other.’ (P.205)

と述べている。このスラブユダヤ的背景が、全体として幻想的な、神秘的な雰囲気醸し出す

面をもつと共に、力強い温かいユーマニスティックな態度を支えていて、短篇集に人間に対する信頼を回復させるような力強い力を与える原動力となっている。

この底流する暖かい柔かい雰囲気と <ironical proceeding of life> とがうまく結合した時には、Malamud 独特の素晴らしい作品が出来上っているが、この両者の結び付きが不成功に終わった場合、例えば徹底した compassion の態度をとってみても、アイロニカルな表現の欠けている場合には、作品全体としては、本来が暗い情況のものだけに、暗鬱な作品という感銘を与えている。その典型は The Magic Barrel 中の短篇 Take Pity という作品であろう。

破産の一途を迎える小売店の未亡人に対して、‘I have a heart and I am human.’ (P.90) だから、窮状を見るに忍びないからといって、考えつかれうる凡ゆる救いの手を——自殺をして保険金をやろうとまでする——さしのべようとするのだが、全て拒否されてしまう。そこには ‘thorough compassion’ の姿が描写され乍らもこのテーマを包む ironical treatment に欠ける事が、この作品が見事な失敗作になった原因があると思われる。

又逆に、この ironical treatment はあり乍らも真髓の compassion の方が希薄になっている為に、ironical and comical touchの方が強く出てきて、作品を軽いものと感じさせているのが title story である The Magic Barrel である。

神学部卒業間際の Rabbi 候補 Leo は、既婚者は教区をもらい易いと忠告されて、広告をたよりに match-broker の Salzman に花嫁探がしを依頼する。Salzman は、Malamud の短篇集の登場人物の基本的タイプの一人といってもよい人物である。即ち裏町の、お人好しで失意の老人である。Salzman は花嫁候補者の写真を樽の中に一杯入れていて、その中から各人に適した女性を紹介するのだといって、未亡人をのっけからシャーシャーとすすめたりする。その上このすすめ方が実にユーモラスなのである。未亡人かといって Leo がまずい顔をする、経験不足だからそんなことをいうのだといって、次のような理窟をこねる。

‘A widow don't mean spoiled……A widow, especially if she is young and healthy like this girl, is a wonderful person to marry. She will be thankful to you the rest of her life. Believe me if I was looking now for a bride, I would marry a widow.’ (P.196)

又相当のオールドミスを年令のサバをよんですすめたり、若い娘をすすめて大分気のりがした頃に、「実は少しビッコで」などといはさんだりする。matchbrokership を諷刺して誠に面白いものである。——ちなみに諷刺という点では、この The Magic Barrel や Idiots First などが優れているといってもよかろう——

尚こうした短篇における素朴であり乍ら、極めて巧みに人心の機微を捉えていく対話のうまさは、当代随一という世評すらある位である。

結局 Leo は Salzman のすすめてくれる結婚は全て断わるが、皮肉にも Salzman が押しつけた写真の中にまぎれ込んでいた売笑婦のような Salzman の娘の写真を見つけ、これこそ自分の理想の相手だと思ひこみ、天にも昇るような心地で花束をかかえてその娘に Leo は会いに行く。一方 Salzman は塀にもたれて死者への祈りを唱えているといった極めて ironical な話のオチ迄がついている。

compassion は相手の生活の凝視、観察という事にもつながり、従ってそこから真実の把握という人生において大切な要素をひき出してくる。偽りの生活を営んでおれば、生活への正しい観察から自らの偽りの生活の暴露という事で、改めて人生に対する新しい視野が展開、啓示されてくることになる。この新しい啓示が小説の一つの面白さになる訳であろうが、こういった面の追求が The Magic Barrel では不足な為に、世評の高かった割合には成功作とは云え

ぬ欠点があったと考えてよからう。

## ② Social Conscience

社会に対して compassion を抱くことは、その社会に対する鋭い観察、正しい判断をひき出してくるものであり、ここから社会に対する正しい認識、批判が産れてくる。この社会批判の面が端的に現れているのが、短篇集 Idiots First の最後に載っている The German Refugee という作品である。

ユダヤドイツ人 Oskar Gasner は、ナチズムの暴虐から逃れて New York に亡命してくる。併し 'Ich bin dir siebenundzwanzig Jahre treu gewesen.' (P.205) と訴えの手紙を寄こす妻を捨てて来ている。或る財団の援助を受け、講演をすることになっている。処が英語の勉強にとりかかっても、講演原稿の作成にとりかかっても、ドイツでの苦しい体験の為、今にもナチの暴力に紛砕されるのではないかという恐迫観念にとりつかれていて、何度やりかけてみても全て努力が挫折してしまう。英語の家庭教師 Martin 青年もお手上げの状態になるが、それでも色々と手をつくしてまずまずという所迄こぎつけ、講演も成功裡に終る。処が Martin が二日後訪れてみると Oskar はガス自殺を遂げている。遺品を整理してみると、義母からの手紙があり、「娘は捨てられた後、私の激しい反対、嘆願にも拘らず無暴にもユダヤ教徒に回宗し、ナチス党員に連行され、素裸のままポーランドの辺境の町で銃殺された」という趣旨のことが書き記されてあった。前掲のドイツ語の手紙と照応して、この事が Oskar の自殺の内的動機を説明する形になっている。

The German Refugee は人間やその苦斗を全て紛砕してしまうナチズムに対する深い憤りと苦しむ人間に対する深い同情の眼と、その苦悩の中に現実には敗北していったけれどもその人間の行為の放つ、道徳的な、人間の美しさを見事に定着させて、名もなき一夫婦の人間の信頼の美しさを描いてみせた佳作である。Malamud にとっては極めて社会性が強く表面に押し出された<一人称>小説である。——社会的抗議と一人称小説の関係も一考の価値のある問題であろう——正しく抑制された、素朴な描写が、その盛激しい社会的抗議にもなっている好例の作品である。感傷的な同情でなく、淡々と描写しており乍ら、底に激しいモラル、情熱を秘めている点、1966年の日本での問題作、井伏鱒二<黒い雨>と同巧異曲の面をもちあわせている。

人間が同胞の生活様式に偏見のない眼を向ければ、それは必ず正しい社会性へと傾いていく事を Malamud の作品は雄弁に物語っており、そして短篇集 Idiots First の最後にこの The German Refugee をもって来た事で、彼のその後の態度、関心の方向を力強く示唆することになったが、はたせるかな1967年の National Book Awards, Pulitzer Prize を受けた評判作 The Fixer はこの傾向をハッキリと打ちたてた作品であった。

最後に The Magic Barrel, The First Seven Years, The Loan 等の作品を読んで感じられるものは、トルストイの民話を読んだ場合に感じられるものと同質のスラブ的雰囲気である。これにユダヤ人独特の民族的陰影が加わり、それを ironic and humorous touch で結びあわせた所から、作品全体にただよう fantasy の世界——貧困な裏町を多く舞台にしているにも拘らず、その貧困のもつ惨めさ、汚ならしさが捨象されてしまって、ほのぼのとした暖かい情緒を醸し出している所が、Malamud の一特色であり、妙味なのであろう。彼の文体の散文詩的特性の鍵もそこにあるように思われる。

人間の苦悩に限りなく compassion の目を向けてはなさず、そこに irony と humor を見つけ出す——出さずにはおかない Bernard Malamud の作家的資質は、激情をおこして人間の

全身をゆさぶる体のものではないにしても、惻々として人間の心をうってやまない力をもっている事において十二分に現代アメリカ作家の旗手と考えて良いのではあるまいか。短篇の名手といっても過言ではない大家であろう。(1967.4.26)

#### 註

① テキストは

The Magic Barrel (Vintage Books, 1958年版)

Idiots First (Farrar, Straus d Co.1964年版)

② 参考文献は

(1) Jonathan Baumbach : The Landscape of Nightmare (New York Uni. Press, 1965)

(2) Alfred Kazin : Contemporaries (Secker d Warburg, 1956)

(3) Saturday Review の諸批評